【参考資料1】 城南地区の開発に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要

昭和40年代後半から、関越自動車道・上越新幹線・上武道路という三幹線の大規模開発が群馬県内で実施が確実になった。上武道路は城南地区を通過するという計画が実施されることになった。なお、昭和50年代からは農業用地の基盤整備事業として「ほ場整備事業」という大開発が開始され、それぞれの開発に際し文化財保護法により事前に埋蔵文化財の発掘調査が実施された。それら発掘調査の概要は下表のようである（内田憲治記）。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
下大屋	**上西原遺跡**（字上西原）・1985年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 奈良・平安時代の竪穴住居80棟、掘立柱建物、井戸、溝、窯、小鍛冶(こかじ)など多くの遺構が検出された。特に一辺が約70mの溝と土塁による方形区画の中に、さらに溝と柱穴列で囲まれた基壇建物や掘立柱建物の遺構が検出され注目された。基壇の周辺から「勢」の文字が押印された瓦が20点出土、他に塑像(そぞう)・銅製飾金具・緑釉(りょくゆう)陶器や100点を超える鉄釘、柱穴からは瓦塔片は多数出土した。 方形区画遺構付近の竪穴住居から奈良三彩の小壺や周辺の住居から「寺」「上寺」「経」「泰」「部」「大」「守」「見」「仲」「目」など百数十点の墨書土器が出土している。この遺跡は方形区画の遺構や出土品により、公的施設とみられ郡司(ぐんじ：郡を収めた地方行政官)ら在地豪族の居館あるいは郡衙(ぐんが：郡役所)の一部である可能性を示している。
	阿久山遺跡（字阿久山）・1989年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 調査区の周辺には赤城山に起因する火山性の低泥流丘が点在している。調査区の12号墳を調査中に石室部を縦断する地割れと陥没溝が検出された。本古墳は横穴式石室を主体部に持つ特徴を有し、7世紀前半頃の築造と考えられる。 地割れは地震に起因すると考えられ、地割れの埋土層の上位には浅間Bテフラ(As－B)層が天仁元年(1108)に降下堆積しており、地震の発生は7世紀前半以降から11世紀末頃と考えられる。
泉　沢	**丸山遺跡**（字丸山）・1986年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 縄文時代の竪穴住居1棟、古墳時代の竪穴住居67棟と円形周溝3基、それと5世紀後半の環濠居館が検出され注目された。環濠居館は同時期の集落が存在する台地面より10mほど高い丘陵部にあり、東西32m、南北25mの長方形区画の外側に上幅2.7m、深さ1.2mで断面形が逆台形の濠がめぐる。濠の内側には柱穴列が発見され防御のための施設が整っていたことも判明した。
富　田	**富田東原遺跡**（字東原）・1979年・道路建設・前橋市教育委員会 縄文時代前期の竪穴住居1棟、古墳時代の5世紀から7世紀代に築造された古墳13基が検出された。古墳時代から平安時代の掘立柱建物14棟、中世の火葬墓5基、五輪塔や板碑、蔵骨器も出土している。板碑には徳治3年(1308)、元享元年(1321)、貞和4年(1348)の年号が刻まれていた。
	富田宮下遺跡（字宮下）・1981年・ほ場整備事業・前橋市教育委員会 弥生時代後期の竪穴住居3棟、古墳時代の竪穴住居10棟(前期2棟、中期8棟)、奈良・平安時代前期の竪穴住居57棟が検出された。
	今城遺跡（字今城）・1991年・温室団地造成・前橋市教育委員会 奈良時代の竪穴住居2棟が検出された。1号住居は東西4.9m、南北6.1mでこの時期としては大型住居である。遺物は鉄製鎌や銅製品などで多数の土器が出土し8世紀中頃のものである。2号住居は削平により住居の痕跡を残すのみであった。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
富　田	いなりまえ **稲荷前遺跡**（字稲荷前）・1996年・上水道受水場造成事業・前橋市埋文調査団 縄文時代の竪穴状遺構と陥穴が検出され竪穴状遺構から縄文前期の土器が出土した。なお古墳時代の竪穴住居は6世紀代で1棟、古墳2基が検出され『上毛古墳総覧』に記載がないものであった。1号古墳は7世紀代の築造で袖型石室を有していた。2号古墳は分強を削平されており埋葬施設は不明である。
荒　口	あらとまえだ **荒砥前田遺跡**（字前田）・1982年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文調査団 発掘された水田は、6世紀中葉頃に開田され荒砥川の氾濫によって埋没していた。氾濫土はほとんどローム層を主体とするもので、上流域の大規模な山崩れ発生によるもので要因は地震と考察された。水田耕作土の上面より出土した土器は、9世紀前半に比定されることから氾濫はその年代と考えられる。
荒　子	あらこしょうがっこうこうてい **荒子小学校校庭遺跡**(字川籠皆戸)・1962年・学術（群馬大学）・1989年・校庭拡張・市教委 1962年の調査で奈良・平安時代の竪穴住居数棟が検出され、1989年の調査で奈良・平安時代の竪穴住居が26棟検出された。「識」の印文をもつ銅印、「車」「千」「前酒」などの墨書土器が出土している。
	つるがや **鶴谷遺跡群**（字鶴谷、荒口町、二之宮）・1980年・前橋総合運動場・前橋市教委 西側丘陵地から弥生時代中期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居が検出された。西側丘陵地からは弥生時代中期から古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居および中世の古墓群や集石群が検出された。
	あらとあらこいせき **荒砥荒子遺跡**（字葭沼乙）・1982年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 標高約104mの低台地上に、幅約2.2m、深さ20～50cmの堀が検出され、堀の内側に2m間隔で柱穴の柵列があり、防御を目的に備えた施設で豪族の居館跡と考察される。居館跡は5世紀後半のもので今井神社古墳と同年代である。
	つつみひがし **堤東遺跡**（字堤東）・1983年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 古墳時代前期の周溝墓3基、平安時代の竪穴住居12棟、小鍛冶遺構も検出された。なお「平」「仙」など異体字の墨書土器も出土している。
	やなぎくぼいせき **柳久保遺跡**（字柳久保）・1984年・住宅団地造成・前橋市教委・埋文調査団 旧石器時代の黒色安山岩のナイフ形石器、縄文時代の押型文や撚糸文などの土器が出土した。古墳時代前期の竪穴住居10棟、中期の竪穴住居15棟、後期の竪穴住居5棟、奈良時代の竪穴住居23棟と掘立柱建物25棟が検出された。
	なかつるたに **中鶴谷遺跡**（字鶴谷）・1896年・住宅団地造成・前橋市教委・埋文調査団 縄文時代前期の土坑14基や陥(おとし)穴(あな)12基、古墳時代後期の竪穴住居17棟、円墳1基を検出された。奈良・平安時代の竪穴住居49棟、掘立柱建物13棟、井戸12基、炭窯1基、土坑が検出され、それらの遺構より「田部」など田に関連した墨書土器が出土しており8世紀中葉から10世紀代に同定される。
	かしらなし **頭無遺跡**（字頭無）・1987年・住宅団地造成・前橋市埋文調査団 旧石器時代の文化層や縄文時代早期の陥穴30基、平安時代の土器製作用の粘土採掘坑も発見されている。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
荒　子	**下境遺跡**（字下境）・1989年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 古墳時代の竪穴住居99棟、古墳22基、中世の墓地などが検出された。古墳はすべて横穴式石室を埋葬施設とするもので、前庭をもつものが多く見受けられ6世紀後半から7世紀代に築造されたものと考えられる。
	舞台1号墳（字舞台）・1991年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 墳丘の長さ42mの帆立貝式古墳で、主丘部は直径34.5mの円形で南西部に長さ8m、前端部幅13.8mの造出しがあり、周堀が馬蹄形状に巡っている。墳丘は埋葬部も含め削平されており二段築成であった可能性が高い。埴輪は円筒・朝顔・器台・家・鶏・盾・蓋形などが出土し、土製品として人物・猪・鳥形が出土している。模造品は鏃・鎌・手斧・刀子・勾玉・有孔円板・臼玉・下駄などで埴輪や土師器により5世紀前半頃の築造と比定される。
	荒砥上諏訪遺跡（字上諏訪）・1977年・県道前橋西久保線拡張・県教育委員会 古墳時代前期の竪穴住居2棟が検出された。遺物は甕・甑(こしき)・小甕・高坏(たかつき)・鉢・坏が揃って出土している。6世紀中期の土器として編年上重要な資料である。北方500mに存在する前二子古墳とほぼ同時期の住居で古墳築造の背景にある集落として注目される。
西大室	**荒砥五反田遺跡**（字五反田）・1977年・県道前橋西久保線拡張・県教育委員会 古墳時代前期の竪穴住居2棟と後期の竪穴住居6棟、平安時代の中期から後期の竪穴住居6棟が検出された。平安時代後期の住居は天仁元年(1108)に爆発降下した浅間軽石が住居中央の床面数センチに近接して埋没していた。出土した土器は編年上の基礎的な資料として価値が高い。
	荒砥東原遺跡（字地田栗）・1979年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代初頭から平安時代後半にかけての竪穴住居22棟が検出された。小規模な集落で各時代に分散しており中心となる集落は認められなかった。
	北山遺跡（字北山）・1980年・ほ場整備事業・前橋市教育委員会 古墳時代前期の竪穴住居15棟、後期の竪穴住居108棟、奈良時代後半から平安時代の竪穴住居52棟が検出された。なお4世紀後半の周溝墓8基、中世の墓坑4基が発見され調査区の南端部に大室元城が存在する。
	西大室七ツ石遺跡（字七ツ石）・1981年・ほ場整備事業・前橋市教育委員会 本遺跡の北側に巨石群がありそれは赤城山の火山性泥流によるものと考えられ、後年に祭祀された遺跡で字名も七ツ石である。古墳時代前期の竪穴住居13棟が検出された。なお『上毛古墳総覧』記載の荒砥村第62号墳と64号墳が調査区内にあり発掘調査した。62号墳は墳丘盛土の基盤層がHr－FP(6世紀中葉噴出の榛名火山軽石)を含む黒色土層で、墳丘には葺石がなく6世紀後半から7世紀前半頃に築造されたものと考察される。
	三騎堂遺跡（字三騎堂）・1982年・ほ場整備事業・前橋市教育委員会 弥生式土器を伴う竪穴住居や古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居も検出されている。
	下縄引Ⅰ遺跡（字下縄引）・1982年・ほ場整備事業・前橋市教育委員会 弥生時代後期の竪穴住居4棟、土坑6基、溝などが検出された。この遺跡周辺には弥生時代後期から古墳時代前期の集落があるものと思われる。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
西大室	**梅木遺跡**（うめのき）（字梅木）・1985年・大室公園造成・前橋市埋文調査団 桂川の右岸に堀と柵列で方形に区画された遺構が発見され、堀の1辺は外側で約85m、内側で約65m、面積は6,500㎡のほぼ正方形と推定される。堀は古墳時代中期末で柵列は古墳時代中期後半の竪穴住居を壊して造られている。度重なる桂川の氾濫により内部の館跡などは確認されなかった。堀の底部付近に榛名山起源のHr－FA(6世紀中葉の火山灰)層の堆積が見られことから、この館は5世紀後半から6世紀初頭まで使われたと考えられ前二子古墳の被葬者との関連を窺わせる遺構である。
	内堀遺跡（うちぼり）（字内堀）・1987年・大室公園造成・前橋市教育委員会 旧石器時代の文化層が発見され300点を超える石器の分布が確認された。石器は東西二つのブロックで構成され、西群は長野産の良質な黒曜石を主体に用いているのに比べ、東群は黒色安山岩や黒色頁岩など県内産出の石材を用いる特徴がある。石器の内容は、局部磨製石斧・打製石斧・ナイフ形石器・削器などである。
	下縄引遺跡（しもなわひき）（字下縄引）・1988年・大室公園造成・前橋市教育委員会 調査区は五料沼の北側に縄文時代前期の貼床と床下土坑を持つ竪穴住居1棟、古墳時代前期の竪穴住居104棟や中期5棟や後期1棟が検出された。
	大道遺跡（おおみち）（字大道）・1988年・工業団地造成・前橋市埋文調査団 縄文時代の竪穴住居23棟、そのうち敷石住居4棟、配石遺構27基や埋設土器9基などが検出された。古墳時代前期の竪穴住居47棟、後期の竪穴住居3棟、奈良・平安時代の竪穴住居1棟が検出された。
	熊の穴遺跡・熊の穴Ⅱ遺跡（くまのあな）（字熊の穴）・1989年・工業団地造成・市埋文調査団 旧石器時代のナイフ形石器など128点、縄文時代前期後半の竪穴住居6棟、古墳時代の竪穴住居11棟、終末期の群集墳19基、奈良・平安時代の竪穴住居7棟が検出された。なお弥生時代から古墳時代へ移行する時期に使用された赤井戸式と称される土器を伴う住居も検出されている。
	西大室丸山遺跡（にしおおむろまるやま）（字丸山）・1990年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 赤城山の泥流丘から巨石の露頭が見られ、周辺から集中的に遺物が出土した。土師器(はじき：坏・高坏)、手捏(てづくね)土器、石製模造品(臼玉1万200、剣400、有孔円板(ゆうこうえんばん)120、勾玉40)など総数1万1000点および少量の須恵器である。ここは赤城山が一望することができ赤城山に対する信仰から生まれた遺構と考えられる。赤城信仰や巨石祭祀遺構を考えるうえで非常に重要な遺跡である。
	荒砥富士山古墳（あらとふじやま）（字富士山）・1991年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 円墳で墳丘の直径36m、周堀を含めた直径は49mで墳丘は4段に構築されており、各段の斜面部には葺石が施されている。埋葬施設は両袖型横穴式石室で前庭を持つ。羨門と玄門には扉石をはめ込む構造である。玄室は四隅を切り平面形は八角形を呈しており他に類例は少ない。遺物は鉄鏃・土師器・須恵器・銅碗などが出土している。埴輪は伴わず遺物と石室の構造から7世紀末の築造と考えられ、1992年に県の史跡指定を受けて現状保存された。
東大室	**荒砥上川久保遺跡**（あらとかみかわくぼ）（字上川久保）・1976年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 多田山丘陵を望む桂川の右岸の低台地に立地し、縄文時代の遺物が検出された。古墳時代前期の方形周溝墓6基と古墳時代前期から平安時代末までの集落は平安時代が中心で竪穴住居は計106棟、井戸4基と小鍛冶遺構が検出された。なお、奈良時代の住居から鋸、平安時代の住居から方形陶硯(とうけん)などが出土した。他に8世紀代の須恵器が出土しており、この遺物は埼玉県比企丘陵から伝わったものであり当地との流通について問題提起がなされた。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
東大室	ひがしおおむろおんなぼり **東大室女堀遺跡**（字吾妻）・1979年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 女堀は上泉付近から佐波郡東村国定(現伊勢崎市)にかけて赤城南麓を横断し、幅は約20mで長さは約13kmに及び掘削された長大な用水堀で謎多き遺構である。調査の結果、堀の深さは約3mで堀の底面が完掘されている部分と掘削途中で放棄されている部分が見つかった。なお工区境の跡が検出された部分が認められた。底面の未完掘状況などを総合的に考察すると、この計画は全線を一斉に掘削されていたが、完成することなく中断されていたことが判明した。 女堀が当初掘削された時、その廃土の下層にはそれ以前の畠が存在していた。その畠の直下にはAs-B層が堆積していた。As－B層とは天仁元年(1108)7月21日に浅間山が大爆発し、それにより中毛地帯はおよそ10cm前後の火山灰が堆積した。女堀はその堆積していたその火山灰層を掘削していたことが判明し、女堀の掘削は浅間火山の火山灰降下後に掘削されていたことが判明した。 しかし、女堀は約13kmにわたり全線が掘削されていたがこの計画は未完に終わっていた。前橋市の上泉町・堀之下・江木・富田・荒口・二之宮・荒子・飯土井から伊勢崎市の下触・堀下・市場から終末点は西国定の独鈷田(とっこだ)で渕名荘内の灌漑用水を目的としたと考えられている。従って、この周辺地域にまで及ぶ絶対的な権力を維持していた施行主体者は藤原姓足利氏とされており、赤城南麓にはその同族が支配する土地であったことから、そのような壮大な大事業が実施されたのであることが想定される遺構である。
飯土井	あかいしじょうし **赤石城址**（字城山）・1977年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 赤石城址は北から北郭・本丸・二ノ丸・南郭の並郭構造であるが、すでに開発が進み調査対象区は南郭の部分であった。南郭の周囲は深さ約2m、上端部幅は約6mのV字状の堀で、それに並行し内側には柱穴列が検出された。赤石城は赤石左衛門尉によって築城され、大永元年(1521)に伊勢崎(曲輪町)へ本拠を移したという。
	いいどいおんなぼり **飯土井女堀遺跡**（字嘉祥）・1980年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 飯土井地区の女堀遺構の調査は東大室の女堀遺構の調査終了後に実施された。堀の上幅は20～30mで深さは約3m、その底面の中央部分をさらに幅5～6m、深さ約1mに掘削してあった。この堀が本来は通水するための完成型の通水路であった。つまり、土砂の崩壊を防ぐための二段堀の構造であった。調査区の中に通水溝の幅が食い違う部分が発見され、これは工区境での掘削工事ミスであることが判明した。 女堀の1工区は約300mと算定され、前線に64工区が設定されたと考えられた。全線約13kmの測量基準の不統一などから様々なミスが生じたようであり、通水路の底面はおよそ標高95m内外であったようであるがこれらもレベルミスが認められた。しかし、赤城南麓を横断する地域には大胡氏・大室氏・赤堀氏などの豪族が支配していた。この領域での大工事が実施できたのは赤城南麓の豪族は渕名荘の藤原姓足利氏の同族であったからで、女堀が完成しなかったのは寿永2年(1182)野木宮合戦(栃木県)で施工主体者の藤原姓足利氏同族連合が没落したことが要因という考察もある。
	あらとふたのせき **荒砥二之堰遺跡**（字二之堰）・1980年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 縄文時代前期から後期の竪穴住居35棟と土坑47基、古墳時代の竪穴住居19棟と方形周溝墓および円形周溝墓10基、古墳21基が検出された。
	にほんまつ **二本松遺跡**（字二本松）・1981年・工業団地造成・前橋市教育委員会 縄文時代中期の竪穴住居2棟、古墳時代前期の竪穴住居6棟、奈良時代後半から平安時代前半の竪穴住居84棟を検出している。本調査区内の女堀調査対象は220mであった。掘削面は幅24mから29.5m、深さ3m前後で堀底部中央はさらに幅約3m、深さ1mの溝を掘削していた。調査区内では完掘されていたが通水の痕跡はなかった。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
飯土井	いいどいにほんまつ **飯土井二本松遺跡**（字二本松）・1985年・上武道路建設・㈶群馬県埋文事業団 旧石器時代後の石器群、縄文時代早期から中期の遺構や遺物をはじめ古墳時代の竪穴住居1棟、奈良・平安時代の竪穴住居24棟が検出された。
	いいどいちゅうおう **飯土井中央遺跡**（字中央）・1986年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 旧石器時代の石器集中出土地点5カ所から発見され黒曜石や黒色安山岩製の石器210点が出土した。縄文時代の陥穴13基、古墳時代の竪穴住居1棟、平安時代の竪穴住居1棟が検出された。
	なかなみき **中並木遺跡**（字中並木）・1993年・工業団地拡張・前橋市埋文調査団 古墳時代前期の竪穴住居3棟が検出され、床面は軟らかく締固められた状態ではなかったが、3棟とも柱穴4と炉を伴っていた。
二之宮	あらとまえはら **荒砥前原遺跡**（字前原、字新土塚）・1977年・ほ場整備事業・群馬県教育委員会 縄文時代中期後半の竪穴住居14棟のうち1棟は柄鏡形の敷石住居が検出された。遺物は石剣や大型石棒などが出土している。弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居23棟と円墳1基が発見された。
	あらとてんのみや **荒砥天之宮遺跡**（字五分一）・1980年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代中期から平安時代まで継続した集落が台地全体に展開し竪穴住居が206棟が検出された。台地末端には7世紀以前に掘削されたとされる4基の溜井(ためい)が発見された。溜井は河川からの灌漑用水の引水が困難な沖積地の新たな開田開発により湧水池を掘り用水を導く古代の稲作灌漑施設である。
	あらとしまばら **荒砥島原遺跡**（字島原）・1980年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 弥生時代中期後半の竪穴住居2棟、古墳時代前期の竪穴住居8棟と方形周溝墓6基、それ以降集落は継続され平安時代まで竪穴住居56棟が検出された。天仁元年(1108)に爆発降下した浅間の軽石に覆われた水田が850㎡発見され、居住域と生産域の発展過程が捉えられる伝統的な農耕集落である。
	あらとみやにし **荒砥宮西遺跡**（字中里）・1980年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代後期から平安時代の集落で竪穴住居24棟、井戸、土坑、溝が検出された。平安時代の遺物で墨書土器として「長」「真」が出土している。
	あらとみやにし **荒砥宮西遺跡**（字宮西）・1980年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代後期の竪穴住居9棟、奈良時代の竪穴住居7棟、平安時代の竪穴住居4棟、他に井戸や土坑、溝などが検出された。平安時代の住居から「真」「長」の墨書土器が出土している。
	あらとあらいばし **荒砥洗橋遺跡**（字洗橋）・1981年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代後期から平安時代にかけての集落遺跡が検出された。特記される遺物に奈良時代の「大郷長」、平安時代の「大上」など24点の墨書土器が出土した。なお平安時代の鉄製焼印も出土している。
	あらとだいにちづか **荒砥大日塚遺跡**（字大日塚・荒口町字前原）・1981年・ほ場整備事業・㈶県埋文事業団 古墳時代の竪穴住居7棟、古墳5基、奈良時代の竪穴住居12棟、平安時代の竪穴住居3棟、時期不明の竪穴住居2棟や井戸・土坑・水田が検出された。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
二之宮	**荒砥青柳遺跡**（字青柳、新井町字百々）・1982年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 奈良時代から平安時代の竪穴住居と土坑・井戸・溝などの他に時期不明の竪穴状遺構な検出し調査された。
	二之宮女堀遺跡（字上ノ坊）・1982年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 女堀は上幅約30m、下幅約18mで中央をさらに掘り下げ通水溝を備えている状態で検出された。底面には大小の小間割が検出され、通水溝には柵(しがらみ)が残っており、掘削作業中の湧水処理の跡であることが分かり、それは工事が中断され未完成であったことを証明するものである。そして他の調査区の西側で走行に食い違いがあり工区境も検出された。東側の微高地では搬出された排土を取り除くと畠が検出され、他地区と同様に畠を潰して女堀が掘削されていることが判明した。沖積地では天仁元年(1108)爆発・降下した浅間B軽石層を掘り込んで女堀が掘られており他地区の調査と同様な結果であった。
	二之宮千足遺跡（字千足）・1986年・上武道路建設・㈶群馬県埋文事業団 縄文時代の陥穴(おとしあな)・埋甕・集積、奈良・平安時代の竪穴住居27棟と小鍛冶が検出された。低地からは6世紀初頭に爆発した榛名山二ッ岳の降下火山灰を挟み上下二面に水田が発見された。さらに天仁元年(1108)に爆発降下した浅間山の降下堆積物下の水田も確認された。水田には種実・昆虫・木製品が出土し、その中でも瓜類の1万点を超える種子は貴重な資料である。中世以降では井戸・土坑墓・溜井が確認された。
	二之宮谷地遺跡（字谷地）・1986年・上武道路建設・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代後期から平安時代終末にわたり竪穴住居85棟、掘立柱建物、井戸、溝などが検出された。低地ではAs-B層(1108年の浅間山爆発降下堆積物)に埋没した水田が確認された。なかでも低地に造られた奈良・平安時代の溜井が発見され、それに付随する「温(ぬる)め施設」も発見されている。溜井からの湧水は冷水であり、稲作の生育や収穫に大きく影響することから、それを補うため「温め施設」で水温を上げて水田へ供給するための施設である。この時代にすでに稲作栽培向上のため灌漑用水の温度を上げるための思考がなされていたことが判明した。
	二之宮宮東遺跡（字宮東）・1987年・上武道路建設・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居23棟、小鍛冶2基、水路23条、浅間B軽石層下(1108)の水田が検出された。
	二之宮宮下東遺跡（字宮下東）・1987年・上武道路建設・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居51棟や鍬・踏み鋤・下駄などが多量に出土した。特記するべき遺物は、131点もの墨書土器が出土したことである。特に則天文字で「天」と書かれたものが多量にあり、蓋のつまみ部に「神」と記されたものは祭祀などに使用されたのであろう。則天文字は、中国・唐の第3代皇帝高宗の亡きあと皇后の則天武后は女帝として実権を握ると、権勢を振るい国号を周と改めた。そして従来の文字の代わりに命じたのが則天文字であったが、しかし在位(690～704)以降は消滅し使われなくなった。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
二之宮	**二之宮宮下西遺跡**（にのみやみやしたにし）（字宮下西）・1987年・上武道路建設・㈶群馬県埋文事業団 調査区は二宮赤城神社南参道の西側で、旧石器時代の土坑3基、古墳時代の竪穴住居37棟、奈良・平安時代の竪穴住居20棟、中世の溝14条、他に井戸や墓坑が検出された。なお中世の溝が検出された。溝の規模は最大で上幅7.2m、深さはほぼ2mである。それにより館跡の東西は約100m、南北は130mの方形を呈することが判明した。溝の底面より出土した板碑は室町時代初頭頃と考えられ館の廃絶は15世紀中頃と推定される。 室町幕府を開いた足利尊氏と弟直義(ただよし)の兄弟対立は、観応2年(1351)に観応の擾乱(じょうらん)という大騒動に発展したが、結局、直義は尊氏方に敗れた。この戦で赤城南面の山上氏・大胡氏・大室氏は尊氏方について奮戦し、その戦功が認められた山上治部介忠勝は尊氏より「二宮」の地を賜り、それ以降は「山上」姓から「二宮」姓に改めたという(『上野名跡誌』)。山上氏は藤姓山上氏の系統で二宮の地に居を構えたことから二宮氏を名乗ったという。本調査により検出された館跡がその拠点であった宮下西館と伝承されておりその可能性が考察される。
	荒砥青柳Ⅱ遺跡（あらとあおやぎに）（字中島）・1994年・二之宮小学校プール建設・市埋文調査団 縄文時代前期の土器・石器を伴う土坑、古墳時代後期の6世紀後半から7世紀後半にわたる竪穴住居12棟が検出され、やや空白期間へ経て8世紀後半に再び住居が造られる。なお、「天」を表す則天文字が刻まれた須恵器の蓋が出土している。中・近世の井戸と土坑も検出している。
	萩原遺跡（はぎわら）（字萩原）・1996年・北関東自動車道建設・㈶群馬県埋文事業団 縄文時代の陥穴や土器埋設土坑、弥生時代中期後半の竪穴住居3棟、古墳時代前期の竪穴住居10棟や土坑7基、平安時代の竪穴住居31棟や土坑4基、時期不明の竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟が検出された。その下層からAs－B層(1108)下の水田や溝が検出された。それは天仁元年に浅間山の爆発で降下堆積した軽石層に覆われ放棄された水田である。その水田は台地上に造られた陸田であり、調査区内だけでは灌漑用水を引いたのかが判然としない。しかし、以前の荒砥前原遺跡に際し萩原遺跡の北東部地点で試掘調査によって溝が検出され、その堀の方向を見通すと、断定できないが新井沼に位置付けられる可能性が考えられる。他に近世の墓坑27基や井戸2基などが検出された。
今　井	**荒砥北原遺跡**（あらときたはら）（字北原）・1981年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 縄文時代の竪穴住居6棟と土坑6基、古墳時代の竪穴住居2棟と方形周溝墓4基と円墳1基、奈良・平安時代の竪穴住居4棟と土坑6基と掘立柱建物1棟が検出されている。
	今井神社古墳群（いまいじんじゃ）（字白山東）・1981年・ほ場整備事業・㈶群馬県埋文事業団 大型前方古墳の今井神社古墳を中心に『上毛古墳総覧』によれば周辺には27基の古墳が存在していた。しかし1981年の時点ではその存在は3基のみであり、残存していた円墳で1号古墳と3号古墳は周堀が確認されたが埋葬施設は削平され残存していなかった。2号古墳は直径約40m横穴式の埋葬施設が残っており、刀・人骨・鉄鏃・管玉類などが発見され、円筒埴輪や形象埴輪が出土している。
	荒砥北三木堂遺跡（あらときたさんきどう）（字三木堂、荒口町字前原）・1982年・ほ場整備・㈶県埋文事業団 調査地は今井沼北側で旧石器時代の槍先形尖頭器製作跡、縄文時代前期の竪穴住居や土坑、弥生時代中期から古墳時代後期、平安時代の集落が検出された。集落は5世紀後半ころから大きく発展し竪穴住居は55棟に達している。

町名	遺跡名・調査年・調査の要因・調査団体
今　井	**今井道上遺跡**（字道上）・1987年・国道50号拡幅工事・㈶群馬県埋文事業団 古墳時代の竪穴住居34棟が検出され、近接する今井神社古墳との関係が指摘されている。奈良・平安時代の竪穴住居1棟や掘立柱建物7棟や方形区画遺構1棟が検出されている。方形区画遺構の規模は一辺ほぼ1町(109m)四方を囲む2重の溝の一部が確認された。これらの溝は上幅1.5m、深さ50cmで東辺の中央部に土橋状に掘り残した部分が見られ、内部には桁行(けたゆき)2間(5.4m)、梁行(はりゆき)5間(9.3m)の大型掘立柱建物竪穴住居がある。8世紀後半から9世紀中葉と考えられ溝の規模や出土遺物から豪族の館跡と推定されている。中世の竪穴状遺構6基が検出された。
	今井白山遺跡（字白山）・1991年・国道50号拡幅工事・㈶群馬県埋文事業団 縄文時代中期の敷石住居1棟と土坑2基、弥生時代の土坑2基、古墳時代の竪穴住居25棟(前期1、中期4、後期20)、奈良時代の竪穴住居15棟、平安時代の竪穴住居7棟が検出された。なお調査地区内に地震により生じた亀裂や陥没や噴砂が確認され、弘仁9年(818)に発生した地震による説に矛盾しない。
笂　井	**笂井八日市遺跡**（字八日市）・1994年・国道50号拡幅工事・㈶群馬県埋文事業団 赤城南麓末端部の前橋台地から広瀬川低台地にかけて遺跡は立地していた。遺構は縄文時代の土坑、古墳時代の竪穴住居と墳墓と方形区画遺構が検出された。方形区画遺構は5世紀後半の遺構と考えられ、台地を横断するように2条の堀が確認された。この堀の幅は8m、深さ1.5mで軸線を真北から45度東側に傾け平行しており、2条の堀の間隔は200mで豪族の居館の可能性が考察される。低地ではAs－B（1108年）層に埋もれた平安時代の水田跡が検出された。

引用・参考文献：『群馬県遺跡大事典』1999 ㈶ 群馬県埋蔵文化財調査事業団編集　上毛新聞社発行